学校モデル【B】

実際の授業場面を想定して、教員を先生・生徒役に分けて行う「実践型研修」

B:校内研修Ⅱ型（講師設定型の研修）

このような教員の姿が生まれました！

- ■ 日常的に「こんな活用してみた。」という、教員間の交流が増えました。
- ■ 「この教科や授業でも使ってみよう。」という、意欲的な教員の姿が増えました。

放課後の教室で、研修を行う

ICT 活用推進担当が先生役、他の教員が生徒役となり、「協働学習支援ツール研修」を行う。

・ICT 活用に不安を感じている教員を中心に研修を行い、難しさを感じている点を共有しながら、操作の仕方を研修する。

・近くにいる教員と相談しながら活動できるような雰囲気で行う。

「協働学習支援ツール研修」を行う際のポイント

- ➢ ICT活用推進担当から説明する時間を極力減らし、実際の授業場面を想定して、協働学習支援ツールの効果的な活用方法についての操作活動を重視する。

「協働学習支援ツール研修」による効果

教員間でICTを活用した授業について、日常的な交流が増え、有効な情報共有につながる。

・「今日、理科で次の単元に関するアンケートをロイロノートで作成して、生徒に答えさせてみた。」

・「ロイロノートでアンケートを作るにはどうすればよいのか？」

・「生徒の画面を他の生徒に画面共有して、生徒自身が画面操作をしながら、みんなに説明できた。」

・「資料を生徒と共有するには資料箱に入れておけばよいのか？」

※上記のような ICT 活用についての会話が増え、情報共有が日常的に行われるようになった。

日常的な交流の中で得た新しい情報を活用しようとする教員の主体的な姿につながる。

・「アンケートを事前に作成して授業の時間に答えさせてみよう。」

・「生徒にロイロノートで資料を配布してみよう。」

・「生徒自身の倒立前転の様子を生徒に動画で録画させて、提出箱に提出してもらおう。」

※上記のような ICT 活用に意欲的な姿が職員室で見られるようになった。

ICT 活用推進担当の指導のポイント

- ➢ 実際の授業で実践した教員の話を聞く中で、その教員の意図を共有しながら、全体でも活用方法を共有できるようにしていく。